

第 57 回日本麻酔科学会・ 第 13 回アジア・オーストラレーシア麻酔科学会

高 畑 治*

この 6 月 2 日から 5 日までの間、第 13 回アジア・オーストラレーシア麻酔科学会(AACA)が福岡市において開催されました。この開催は第 57 回日本麻酔科学会との併設であり、共通したテーマとして「麻酔の安全・快適性の追求とフロンティアへの挑戦—Safety and Challenge—」を掲げていました。この AACA はアジア・オーストラレーシア地域での最大規模の国際麻酔科学会とされており、39 カ国の構成メンバーからなり、4 年に一度の開催となっているものです。前回はシンガポールで行われ、今回、我が国としては初の開催でした。自分としても、日本国内で行われた国際学会、特に心臓血管などの特定領域を超えた幅広い国際麻酔科学会への参加は初めてであったため、どのように運営されるのか興味のあるところでした。

6 月 1 日には 17 時 30 分から AACA 開会式とレセプションが行われ、麻酔科学会通常総会に出席した麻酔科学会理事ならびに代議員に加え、多くの外国人参加者が出席していました。この開会式は学会長である長崎大学、澄川教授による開催宣言で始まり、日本麻酔科学会理事長、森田教授と WFSA のアジア・オーストラレーシア地区代表の花岡先生が、ご挨拶をされていました。記念講演として弘前大学医学部名誉教授である松木明知先生が、華岡青洲の業績を学会テーマである“Safety and Challenge”と関連づけて紹介されていました。また、日本の伝統文化を披露するオープニングセレモニーでは、フラッシュをたく外国人参加者が多く見られ、国際学会ならではの雰囲気を感じました。

今回は両学会の併設という形式をとられていたため、外国人招待演者は 100 名を超えており規模の大きさを物語っておりましたが、6 月 2 日の時点では AACA のみの開催であり、日本人出席者はまばらな状況でした。この翌日から麻酔科学会が開催されましたが、AACA と麻酔科学会では開催会場フロアーが異なっていたため、それぞれの学会員が異なる学会会場へ足を踏み込む機会は少なかったように感じました。唯一、同じ会場で行われたポスター部門も、AACA では指定された 1 時間の間、発表者がポスター前に待機している状況であり、座長との議論が行われる機会はみられませんでした。当教室からも埼玉医科大学総合医療センターから研修にいらしている宮下佳子先生が、ポスター部門で発表されていました。発表内容は医療センターでの産科麻酔に関するものであり、「照井教授からのご指導、ご助言を数多く受けました！」と国際学会での発表を難くこなされていました(写真)。

AACA には 28 カ国から 344 演題が採択され、plenary lectures として末梢作用性 μ 受容体拮抗薬、手術室の運営、局所麻酔薬の安全性と麻酔学の教育・安全についての発表がなされていました。末梢作用性 μ 受容体拮抗薬では、麻薬性鎮痛薬の中枢作用としての鎮痛効果を維持しつつ、末梢作用に伴う様々な副作用を拮抗する methylnaltrexone (MNTN) について、シカゴ大学 Moss 教授が詳細に解説され、麻薬性鎮痛薬の作用機序を理解する上でとても勉強になりました。会場には日本人はまばら(学会 2 日目であったため)ではありましたが、興味深いセッションの一つとなりました。麻薬性鎮痛薬の鎮痛作用は中枢性であり、嘔気・嘔吐

*旭川医科大学麻酔・蘇生学講座

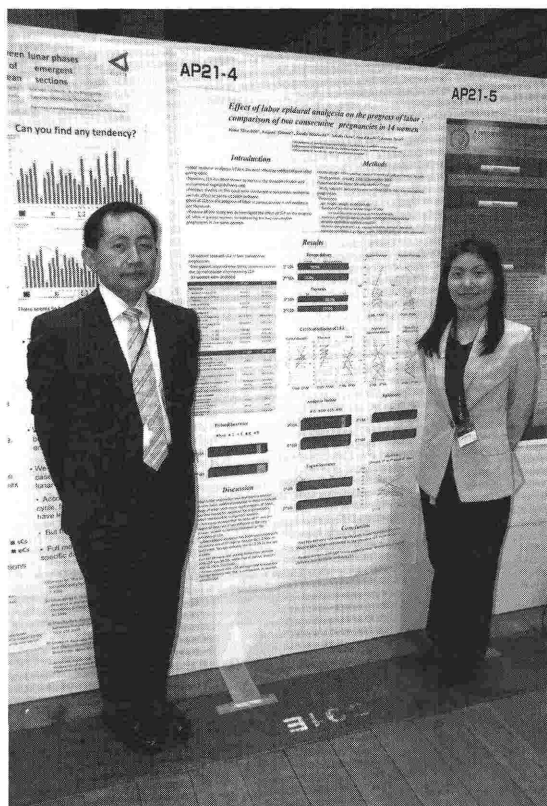


写真 ポスター会場風景，宮下佳子先生とともに

といった副作用は末梢性作用を介することから，MNTXにより強力な副作用の抑制が可能と解説されていました。また，麻薬性鎮痛薬が HIV 感染，腫瘍での血管新生や血管透過性にも関連することが，MNTXを用いた様々な実験から明らかにされつつあることも述べられており，今後の研究発展が期待される分野の一つと考えました。

今回の AACA では 30 ものシンポジウムが 3 会場で並行して行われ，小児麻酔から集中治療，経食道エコーなど臨床分野に加え，痛みの基礎的研究まで現時点での麻酔学のほぼ全領域を網羅するものでした。これらシンポジウムの大部分に日本人が座長またはシンポジストとして参加されており，活発な討論を日本人とは思えない流暢な英語でなされていました。このような光景を卒後間もない麻酔科医が見ることは，日常臨床に対するモチベ

ーション向上に有用と考えられました。

ワークショップは上下肢エコー下ブロック，3D 経食道エコー，気道確保困難，シミュレーターなど 5 つからなり，麻酔学会との重複も十分予想される内容でした。このため，プログラム作成での調整など，ご苦勞が多かったであろうと推察できました。両学会に重複してワークショップならびにシンポジストをされた諸先生，大変お疲れ様でした。

ポスター部門で発表演題数を数えてみたところ，335 演題が抄録掲載されており，この中で優秀発表にあたると思われる excellent abstracts は 19 演題でした。Excellent abstracts 19 演題の内容は基礎実験から臨床まで幅広いものでしたが，我が国からは 6 演題が選出され，国別では最多となるものでした。

今回のような学会併設は，日本からの発表も多く，国際学会を身近に感じることができる良い機会と考えました。麻酔学会会員の多くが，今回のような機会に触れることにより，国際学会での活躍に目を向ける動機付けの一つになることは，学会のさらなる発展に寄与すると想像できました。

ただ，とても残念なことは，シンポジストのキャンセルや excellent abstracts に選ばれたポスターが貼られていなかったものが少なからず見られたことでした。アジア-オーストラレーシア地区という広大な地域からの参加のため，距離的な問題があるのかもしれませんが，異なった国々の麻酔科医が一堂に集まる数少ない機会であることを考えると，演題が採択された場合，それ相応の準備を演者にはお願いしたいと考えました。4 年後は 2 月にニュージーランドでの開催が決定しており，日本国内での学会開催が少ない時期であり，我が国からの参加者が多くなると予想されました。

最後になりましたが，AACA と麻酔学会の併設に際して，準備をご担当された多くの諸先生，関係各位の皆様のご苦勞に，深く感謝いたします。大変，お疲れ様でした。